混沌少女が異世界から来るそうですよ？

香坂　夜狐

注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

様々な偶然によって生まれ落ちた1柱の邪神。その邪神が流れ落ちた世界、それは様々な種族や修羅神仏の集まる世界〝箱庭〟。そこで彼女が何を思い、何を成すのか、それは誰にも分からない。しかし、1つ言える事は、彼女の身は邪神故に、良くも悪くも彼女もまた〝問題児〟という事だ。

――――――週に1話ぐらい投稿出来ればと思います、慣れない点も多々あると思いますが宜しくお願いします。

目次

第0話～混沌が生まれたようですよ？～ ―――――――――――――― 1
第1話～問題児達と邪神が箱庭にやって来たようですよ？～ ―――――――― 8
第2話～説明のようですよ？～ ―――――――― 16
第3話～初ゲームのようですよ？～ ―――――――― 23
第4話～森の中のようですよ？～ ―――――――― 32
第5話～サウザンドアイズのようd、ぎゃーーー!?～ ―――――――― 47
第6話～白き夜叉～ ―――――――― 54
第7話～神語りのようですよ？～ ―――――――― 60
第8話～説明回のようですよ？～ ―――――――― 68

第0話～混沌が生まれたようですよ？～

やぁやぁ、みなさん初めまして、こんにちは、こんばんは。

出会って早々、唐突だけれども皆様に聞きたい事がある。え？、何だって？急すぎる？

それはそうさ、なんせ僕、いや私？、俺？、ワタクシ？、、、失礼、脱線してしまったね、ここは便宜上ボクと言わせてもらおうかな？。

さて、なんだっけか、、あぁ、そうだそうだ、皆様方に聞きたい事があるんだった。改めて聞きたいんだけれども、、、此処は何処？

いや、いきなり聞かれても分からないか。ここは1つ、僕がどこに、どのようにして居るのか聞いてもらうとしよう。

話はおおよそ1時間前に戻るんだけど――――――

――――今日、ボクは1日を何時ものように過ごしていたんだ。当たり前のように起床し、当たり前のように朝食を食べ、当たり前のように高校に登校する、そんな、どこにでも有るような、ありふれた日常。

ボクの名前は頭の中に霧がかかったかのように思い出せないが、、そんな普通の日常

を過ごしていたはずだ。
ただ、その日は何時もとは違う事が1つあった。
下校中。何時もの道をボクは歩いていた。季節は秋。公園に目を向ければ何時も通りの平和な光景。赤々と紅葉した木々、幼いころに遊んだ遊具の数々、時折野太い叫びが聞こえると有名な公衆トイレ、そして、、夕日に照らされている黒々とした触手。
…うん、オカシイね。ボクの目がおかしくなったのか、目をこすって再度触手を見直す。
……触手が、目の前で蠢いていた。
超度アップ、真ん前。
「…ヴぇ?」
つい、つい呟いた瞬間、、ボクは触手に飲み込まれた。
その、次の瞬間、赤と紫と黒を混ぜたかの様な迷彩柄の、上も下も分からない様な場所にボクは居た。
ここで質問に戻るんだけど――――――
――――――此処は何処?
まぁ、そんな訳でボクは混沌迷彩とでも言えるような色彩の場所に〝浮いている〟。たとえるならば、水に浮いている感覚がちかいけれども。体を動かしていても抵抗感は

感じない。
そんな不思議空間に閉じ込められて1時間か、2時間か、時間の感覚はすでに麻痺したといってもいいだろう。
そんな中でする事、出来る事といえば現状の確認のみ。
まずは名前、先ほども言ったようにこれは、頭に霧がかかったかのように思い出せない。
自身の容姿は、ゴスロリ?に形状が近いだろうか、リボンやスカートの裾には白黒のチェス柄、俗に言う市松模様が施されている。そして足元は黒の二―ハイソックスにそれに合わせた黒のブーツだ。そして、先ほどから視界の隅に入り込む長い髪は銀。
この服装から見てボクは女性のようだ〝私〟に変えるべきだろうか、、そうしようか。
次に、周囲を再度確認するが、相変わらずの混沌迷彩。
と、そのとき、腕に何かあたり、そちらを確認すると私のとなりには、私と同じように漂う金属とおもわれる赤と青の二色に塗られた棒、、バール?
なぜ、バール?が、と思い手に取ってみて、頭の中に私の知らない情報が流れ込んできた。
頭の中に知らない事柄が刻み込まれていく不快感、その不快感に声を上げようとするが、喉を震わせても口からは一切の音は出ずに、その気持ち悪さに体を震わせる。

気持ち悪い
きもちわるい
キモチワルイ……

……どれほど、そうしていただろうか。私は頭の中に知識が刻まれる不快感にこらえながら、その知識から現状を理解していく。

私が遭遇した触手、あれはＮｙａｒｌａｔｈｏｔｅｐ、ナイアーラトテップやニャルラトホテプと呼ばれる邪神の顕現のうちの１体だったらしい、ナイアーラトテップとは、別名として「這い寄る混沌」「無貌の神」「闇に棲むもの」と呼ばれる邪神の１柱だった。

無貌、つまり顔がない故に千もの異なる顕現を持っていて、それらを使って世界に狂気と混乱をまき散らす邪神だ。

そして、私自身も、人として生まれ人として育っていた顕現のうちの１人だった、知らなかった事だけど。あのまま人間社会で過ごしていたら、世界を狂気と混乱の渦に巻き込む何かをしていたらしい。

そして、ここからが私の現状。あの触手は顕現の中では珍しく人外として現れていた為に力は飛び抜けて強く、知能は飛び抜けて低かった。そのため、通りかかった私を同

じ顕現だと分からずに捕食。触手と私は姿形は違うけれどもＮｙａｒｌａｔｈｏｔｅｐの顕現、つまり同じ存在であった為に同化、知性が触手より高い私が体の主導権を得たが、人型の体は捕食されて存在しないため、私の知識をもとに体を再構築したらしい。

そのために、私の容姿は娯楽小説である「這いよれ！　ニャル子さん」の中の登場人物であるニャルラトホテプ星人、ニャル子と同じ容姿になっている。

さらに、私は顕現の中でも飛び抜けて力が強い触手と同化したため、他の顕現とは外れ、１人の個として確立した。これは、私が人間社会に自然の入り込むためにＮｙａｒｌａｔｈｏｔｅｐの顕現としての自意識を持たされずに、成長していき自我が確立していた為におこった現象らしい。

こうしてＮｙａｒｌａｔｈｏｔｅｐ（ナイアーラトテップ）から独立し、もう１柱のＮｙａｒｌａｔｈｏｔｅｐ（ニャルラトホテプ）として私は確立した。

次に私が現状居る場所だが、これは私がＮｙａｒｌａｔｈｏｔｅｐとして確立したために世界から同じ存在は２柱もいらないと判断され、はじき出された世界の狭間である。

そして、この暇な空間で私は宙に浮きながらボーとする。

この世界の狭間では特にやることも何もないからボーとしてるしかない。私はＮｙａｒｌａｔｈｏｔｅｐ（ナイアーラトテップ）からは独立しているために世界を狂気と

混沌に誘うとかはもうどうでもいい。する世界も現状ないし、Ｎｙａｒｌａｔｈｏｔｅｐの自意識なく成長していた私は影響は受けているが、ほぼ人間と変わらない感性をもっている、と思う。

なので、特に破壊願望などは無い私はこの空間で、ボーとしているしかない。出ようとしてもどうすればいいのか分からない。

そんな空間で漂って、知識も定着し、気持ち悪さも引いて行ってどれほど経ったのだろうか。

１日?１週間?１年?いや、既に数十年たっているかもしれない。

もう時間の感覚はすでになく、考える事もなく漂う私。

邪神ゆえに睡眠や食事も行う必要がなく、狂気と混沌の権化ゆえに狂うこともない。

一人で過ごすには長すぎる時間を私はただ、淡々と何も考える事無く空虚に過ごしていく。

退屈は神をも殺す、とはよく言ったものだ。

思考を放棄する事も出来ず、かと言えば考える事もなく。

いまの私は死体と何も変わらないのでは、と、そんな錯覚まで覚えてしまう。

そんな私の、目の前に突如光が走ったかと思うとそこには１通の手紙が漂っていた。

私は久しく体を動かし、目の前の手紙をつかむと、封をきり中身を読む。

～悩み多し異才を持つ少年少女に告げる～
～その才能を試すことを望むならば～
～己の家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨て～
～我らの”箱庭”に来られたし～
次の瞬間、この空間に来てから感じていた浮遊感は消えてなくなり。
「……え？」
広大な大空に私は投げ出された。
これが、私が長い時を過ごし、様々経験をする世界〝箱庭〟へ流れついた瞬間だった。

1柱の邪神が流れ着いた世界〝箱庭〟
この世界で彼女が何を思い、何をなすのかは誰にもわからない。
しかし、1つ言える事は彼女は邪神であるが故に、良くも悪くも〝問題児〟である事は間違いないと言う事である。

ネタ解説
時折野太い叫びが聞こえると有名な公衆トイレ
阿部さん。それ以上言う事はない。

第1話～問題児達と邪神が箱庭にやって来たようですよ？～

体に感じる混沌の世界とは別種の浮遊感、そして強い風。
下を見れば広大な世界が眼下に移り、その最果てまで見る事が出来る。
左右を見渡せば、自身と同じ様に驚愕の表情を浮かべながら落下する男女、自身含め計４名＋猫１匹。
そんな状況においてクトゥルフ神話において、邪神と崇められ、最強の神と同等の力を有するといわれる土の精であり、神としては土の神性を持つ存在である彼女は……
「ぎゃ――――――――――――――――――――――――――――ん!!!?」
……無様な悲鳴を上げていた。
無理もない事である。前述したように彼女は〝最強の神と同等の力を有するといわれる土の精である邪神〟、〝土の精〟
そう、Ｎｙａｒｌａｔｈｏｔｅｐ、ニャルラトホテプである彼女は土の神性をもつ存在である。

空を飛べる飛べないにかかわらず、本質としては地面に足を付けているのだ。ましてや、力は強大で、その気になれば空を飛べる彼女でも、その精神は世界の狭間たる空間で長い年月を過ごしたとはいえ、人間の中で十数年生きていた存在だ。
本能で飛べると理解はしている、が、急に出た空は異常なほどの高さ。ニャルラトホテプとわいえ変な悲鳴が出てしまってもおかしくない。
そのような悲鳴を上げつつも、どんどんと眼下の湖には近づいていき、
（ぶつかる!!）
彼女が力を使おうとするよりも早く
（!?）
突如として風が巻き起こり、体が一瞬減速し、
「のぶっし!?」
水面に着水した。
まぁ、あのままの速さで当たったとしても彼女には傷1つ付かなかっただろうが。
そして、そのまま次々と着水していき、びしょ濡れになる4名と1匹。
4人と1匹は、猫がおぼれかけるというハプニングがありながらも、意外と深い位置に落ちたため、泳いで陸にあがり、服から水分を絞る。
「し、信じられないわ、いきなり空に放り出すなんて！下手すれば地面に当たって即死よ

!!」
「同意です!!あんな高さから落ちたら擦り傷ぐらいなら出来てしまいます!!」
「あぁ、まったくだ。場合によっちゃゲームオーバーコースだぜ、コレ。石の中に呼び出されたほうがまだ親切ってもんだ」
　服を絞りながらも文句を言う長い黒髪の気の強そうな少女に同意を返すニャルラトホテプと金髪の少年。後者二人は何か間違えている。
「いや、、擦り傷じゃすまないし、石の中に呼び出されては動けないでしょ?」
「俺は問題ない」
「私も問題ありません!!ノープロブレムです!!」
「そう、身勝手なのね」
　ツッコミを入れる少女に対してそう返す二人にに対して、少女も軽く返す。
　その横で最後の一人であるショートカットの少女は濡れた猫の体を拭いている。
「んで、お前ら誰だよ」
「それはこっちの台詞よ。目つきの悪い学生くん?」
「一応確認するけど、お前らの所にも変な手紙が?」
「その通りだけど、そのお前って呼び方を訂正して。私の名前は久遠飛鳥よ。以後は気を付けて。それで、そこの猫を抱えてるあなたは?」

売り言葉に買い言葉、軽口を叩いている二人。
そして、飛鳥は猫を抱えて拭いている少女に話題をふる。

「春日部耀。以下同文」
そう短く返すショートカットの少女、改め耀。
「そう、よろしく春日部さん。で、そこの野蛮で凶暴そうな貴方と若白髪の貴女は？」
挑発的に話を振られ、にやりと笑う金髪の少年と、若白髪扱いされショックを受ける邪神。
「高圧的な自己紹介をありがとよ。見たまんま野蛮で凶暴な逆廻十六夜です。粗野で凶悪で快楽主義と三拍子そろった駄目人間なので、用法と用量を守った上で適切な態度で接してくれよ、お嬢様？」
「そう、取り扱い説明書を作ってくれたら考えてあげるわ」
「マジかよ。今度作っとくわ。んで、若白髪のお前は」
再度、白髪扱いされショックを受ける邪神。
「ひどいです!!私は白髪じゃなくてぎんぱつですよぅ」
「ワリーワリー」
「あぁ、そう。ごめんなさいね」

「反省の意思がかんじられませんよ!?」
　十六夜と飛鳥の対応に少し涙目になる邪神、コホン、と息を整えると、
「では、改めまして。私、八坂ニャル子と申します、コンゴトモヨロシク」
　本名を名乗り、問題が起きる危険を避けたいために偽名を名乗るニャルラトホテプこと
ニャル子。
「わりーが、サマナーじゃねぇんだわ」
「自己紹介が普通ね」
「変な名前」
「駄目出し三昧!?」
　自己紹介で駄目だしされるニャル子。
　邪神相手に、知らぬとはいえ、ここまでダメージを与える存在も珍しいだろう。
　ちなみに、この邪神。発言などから分かるように、容姿の元となった某ニャルラトホ
テプ星人の影響がだいぶ出ている。
　その４人＋１匹の様子を草陰から覗く人?の影。
（うわぁぁ、どのお方も一癖も二癖もありそうな問題児ばかりですねぇ）
　自己紹介が終わると、４人は現状の把握のために辺りを見渡す。
「で、呼び出されたいいけどなんで誰もいねぇんだよ」

「ええ、そうよね。何の説明もないままでは何もわからないもの」
　その様子を見て、隠れている存在はにやりと笑い、、
「…仕方ねぇな。こうなったら、そこに隠れているやつにでも話を聞くか？」
「あら、貴方も気づいてたの？」
「当然。かくれんぼじゃ負けなしだぜ？　そっちの二人も気づいてたんだろ？」
「風上に立たれたら嫌でもわかる」
「もちろん!!年間発情期のにおいがプンプンします!!」

「ウサギは発情期ではございません!!」

「「「……」」」

「……あ」
　つい、といった様子でウサ耳少女が出ていき、引き攣った笑顔になる。
「なにあれ？」
「コスプレ？」
　出てきた少女に対して、その珍妙な服装とウサ耳に対しての素直な感想を述べる飛鳥

と耀。

それに対して、出たきた少女はあわてた様子で答える。

「ち、違います。黒ウサギはコスプレなどではございません!!黒うさぎは―「まぁ、それは良いんだけどさ」―はい?」

その台詞の途中で遮る十六夜に対し、少女、本人の弁を取るならば名前は黒ウサギ、呆けたような表情になり。

「そろそろ話を聞かせてもらおうじゃねーか」

そう言いながら距離を詰めてくる十六夜に対して、再度表情を引き攣らせ後ろにじりじりと下がり、

「逃がしませんよ～♪」

いつの間にか後ろに控えていたニャル子に肩を捕まえられた。

「み、皆様方?お、落ち着いて話を…」

そのまま、前方から十六夜、左右から飛鳥と耀、背後にニャル子と囲まれる黒ウサギ、そして……

「ギニャアアアアアアアアアアアア!!!?」

……森に黒ウサギの叫び声が響いた。

ネタ解説

「ぎゃーーー!!!?」

ガンダムに登場する有名機体。

「のぶっし!?」

機動武闘伝Ｇガンダムに登場。ネオジャパン軍ＪＭＳ―７１ノブッシ。

コンゴトモヨロシク

女神転生シリーズより。悪魔が仲間になった時の台詞。ちなみに、同作品にニャルラトホテプがアクマとして登場するのは有名。

サマナー

女神転生シリーズより。悪魔召喚師（デビルサマナー）の事。

年間発情期

ウサギは年間発情期らしい。真偽は不明。

第２話～説明のようですよ?・～

黒ウサギが捕まり1時間ほどが経った頃、

「……うぅ」

木々に囲まれた森の中、湖の近くの開けた場所に横たわる一人の少女、もとい、黒ウサギ。

力なく脱力する彼女の様子を少し離れた位置から観察する、十六夜、飛鳥、耀。ニャル子の４人。

「おい、どうする?説明どころじゃねぇぞ?」

「ちょっとヤリすぎたかしら?」

「…好奇心に走りすぎた」

「いやー、みごと弱点だったみたいですねぇ」

小言で話す４人。内容から折る程度の予測が立つとはおもうが、彼ら４人は黒ウサギを囲んで確保した後、彼女の耳を本物か?という自身達の愚問を晴らすためにいじくりまわしたのである。その結果が横たわり、悲しみに暮れる黒うさぎであった。

さすがにこのままでは話が進まない為に、哀愁を漂わせ始めた黒ウサギに声をかける

ニャル子。

「あの～、そろそろ説明のほうを「そうでございました!!」……」

声をかけられ、内容を思いだす黒ウサギ。彼女の様子を見るに元気なようだが、回復が早かったのか、ただ単にタフなのか。

「ありえない。ありえないのですよ!!まさか黒ウサギの素敵耳をいじくりまわすだけで小一時間も消費してしまうとは、学級崩壊とはきっとこのような状況を言うに違いないのです!!!」

テンション高く憤慨する黒ウサギ、まさか彼女も耳だけで時間をこんなに使うとは予想だにしていなかったらしい。

「では、あらためまして説明を……コホン」

冷静になって一息つくと黒ウサギは両手を広げ、四人に向き直る。

「ようこそ、〝箱庭の世界〟へ!!我々はあなた様方にギフトを与えられた者達だけが参加できる特別なゲーム、〝ギフトゲーム〟への参加資格をプレゼントさせていただくため、召喚いたしました!!」

「〝ギフトゲーム〟？」

十六夜の呟きに同調するように疑問顔の面々に対して、テンポ良く、テンション高く

言葉を続ける黒ウサギ。
「そうです!!既に気づいてらっしゃるでしょうが、貴方様方は皆、普通の人間ではございません!!その特異な力は様々な修羅神仏から、悪魔から、精霊から、星から与えられた恩恵でございます。〝ギフトゲーム〟はその恩恵を用いて競い合うためのゲーム。そしてこの箱庭の世界は強大な力をもつギフト保持者が面白可笑しく生活できるために造られたステージなのでございますよ!!」
　説明を聞き、疑問を感じた飛鳥が挙手して質問を述べる。
「まず初歩的な質問からしていい?貴女が言う〝我々〟とは貴女を含めた誰かなの?」
「ＹＥＳ!!異世界から呼び出されたギフト保持者は箱庭で生活するにあたって数多とある〝コミュニティ〟に必ず属していただきます♪」
「イヤだね」
「属していただきます!!」
　飛鳥の質問に対する答えに、十六夜が嫌だと答え、黒ウサギが語尾を強めにして返す。
「そして、〝ギフトゲーム〟の勝者はゲームの主催者、即ち〝主催者（ホスト）〟が提示した賞品をゲットできるという、とってもシンプルな構造になっております」
「…〝主催者（ホスト）〟って?」

今度は耀が上げた質問に対して答える黒ウサギ。

「それは様々ですね。暇と持て余した修羅神仏が人を試すための試練と称して開催されるゲームもあれば、コミュニティの力を誇示するために独自開催するグループもございます。特徴としては、前者は自由参加が多いですが、〝主催者（ホスト）〟が修羅神仏だけあって凶悪かつ難解なものが多く、命の危険もあるでしょう。でも、その分見返りは大きいですよ。〝主催者（ホスト）〟しだいですが、そのゲームに勝ってギフトを手にすることも夢ではありません。後者は参加のためにチップを用意する必要があります。参加者が敗退すればそれらは全て〝主催者（ホスト）〟のコミュニティに寄贈されるシステムです」

「後者は結構俗物ね。で、チップには何を？」

「それも様々ですね。金品・土地・利権・名誉・人間、、そして、ギフト（才能）を賭けあうことも可能です。新たなギフト（才能）を他人から奪えばより高度なギフトゲームに挑むことも可能でしょう」

「そう。最後にもう一つ。ゲームそのものはどうやって始めるの？」

「コミュニティ同士のゲームを除けば、期日内に登録すればＯＫです!!商店街でも商店が小規模のゲームを行っているので、よかったら参加してみてください!!」

「……つまりギフトゲームとはこの世界の法そのもの、と考えてもいいのかしら？」

世界の法か、そう尋ねる飛鳥に対して意外そうにする黒ウサギ。

「ふふん?中々鋭いですね。しかしそれは８割正解の２割間違いです。我々の世界でも強盗や窃盗は禁止ですし、金品による物々交換も存在します。ギフトを用いた犯罪などもってのほか!!そんな不逞な輩は処罰いたします、が、しかし!!ギフトゲームの本質は全く逆!!一方の勝者だけが全てを手にするシステムです。店頭に置かれている商品も、店が提示したゲームをクリアすればゲームに参加した労力のみで手にする事が可能ということですね」

「そう、野蛮ね」

「ごもっともです。しかし主催者は全て自己責任でゲームを開催しております。つまり奪われるのが嫌な腰抜けは始めからゲームに参加しなければいいだけの話でございます」

　そこで今まで話を聞いていたニャル子が疑問を飛ばす。

「質問です、ギフトを用いた犯罪は不可、と言いましたが、それはギフトゲームを通した結果ならばどんな事でも合法、という事でしょうか?」

　そのニャル子の質問に黒ウサギは目を軽く見開いて驚きを表し、間を置いて質問に答える。

「…ＹＥＳ、どのような事でもギフトゲームの結果ならば合法とみなされます」

「では、たとえばですが、プレイヤーに対して〝主催者（ホスト）〟が釣り合わない対価でのゲーム

を行う事も合法ですか？」

「……そちらもＹＥＳ、ギフトゲームの中での事はすべて合法とされます。そして、極少数ですが、相手の弱みや、あるギフトを使って半ば強制的にギフトゲームに参加させる〝主催者（ホスト）〟も存在するにはします」

そこで少し暗い様子を見せる黒ウサギだが、それを振り払うように明るい口調で言葉を述べる。

「さて、皆さんの召喚を依頼した黒ウサギには箱庭の世界における全ての質問に答える義務がございます!!しかし、それらを全て語るには少々時間がかかるでしょう、新たな同士候補である皆さまを何時までも野外に出しておくのは忍びありません!!ですので、ここから先は我らのコミュニティでお話させていただきたいのですが、、よろしいですか？」

「待てよ、まだ俺が質問していないだろ？」

そこで、今まで静かに話を聞いていた十六夜が声をかける。

「…どういった質問ですか？ルールですか？ゲームそのものですか？」

先ほどのニャル子の件もあるため、少々警戒気味の黒ウサギ。

「そんなのはどうでもいい。腹の底からどうでもいいぜ、黒ウサギ。お前に向かってルールを問いただしたところで何かが変わるわけじゃねえんだろ?世界のルールを変えようとするのは革命家や政治家の仕事であって、プレイヤーの仕事じゃねえ。俺が聞きたいのは、ただひとつ。あの手紙に書いてあったことだけだ――

――この世界は……面白いか?」

その言葉を聞いて、黒ウサギは一瞬、きょとんとした表情を浮かべるが、すぐさま十六夜達に会ってから１番の笑みを浮かべ――

「ＹＥＳ!!ギフトゲームは人を越えた者達だけが参加できる神魔の遊戯、箱庭の世界は外界より面白いと黒ウサギは保証いたいます♪」

――そう答え…否、断言した。

第3話～初ゲームのようですよ？～

―箱庭・第２１０５３８０外門前―

大きな石で出来た立派な門の前、そこで石のブロックにまたがる1人の少年が居た。

「ジンくーん!!」

遠くから声をかけられ、そちらに顔を向ける少年―ジン。彼に対して声をかけた水桶を持った、狐のような耳と尻尾を持つ少女は共に居た少年少女と共にジンに近づく。

「リリ、皆もご苦労様」

そんな狐の少女―リリたちに対して労いの言葉をかけるジン。

「黒ウサギのお姉ちゃんは、まだ戻ってないの？」

「うん」

どうやら彼達は黒ウサギの仲間のようである。その後、2，3言、言葉を交わすと門の内側に入っていくリリ達、彼女達を見送る彼の背に言葉がかけられる。

「ジン坊ちゃーーん!!」

その声につられ、後ろを見ると離れたところに居る黒ウサギとその後ろを歩く三人の女性を見つける。

「新しい方々を連れてまいりましたよー!!」
「お帰り、黒ウサギ。そちらの”３人の女性”が?」
　言いながらも近づいてきた黒ウサギに声をかけるジン。
「イエース、こちらの方々が……」
　その言葉に返答しようとして、途中で止まる黒ウサギ。彼女は後ろに続く３人を見て――
――女性だけでしたっけ?――
――あれ?１人足りなくないですか?――
――その考えに１瞬の間を置いていきつく。それと同時に――
「あるぅえ?もう１人いませんでしたか?主に不良ぽいヘッドホンの方とか――」
――疑問の声を上げた。
「あぁ、十六夜君なら『ちょっと世界の果てをみてくるＺＥ☆』とか言ってあっちの方に駆けていったわ」
　そんな彼女に対して、そう答える飛鳥。
「なんで止めてくれなかったんですかぁ!?」
「『止めてくれるなＹＯ☆』とも言われたもの」
「どぉして黒ウサギに教えてくれなかったのですかぁ!?」

「『黒ウサギには言うなよ』と言われたから」
「嘘です、絶対嘘です、実は面倒臭かっただけでしょ!!お二人さん!!」
腕を振りながら涙目になる黒ウサギに対して、飛鳥と耀の二人は―
「「うん」」
そう声をそろえて返す。
それに対して一瞬ぽかんとなる黒ウサギ、そんな彼女に声がかかる。
「く、黒ウサギ?あの、もう1人の人が、それに世界の果てには…」
今の今まで忘れられていた少年の言葉に八ッと顔を上げる黒ウサギ。
「そ、そうでした、世界の果てにはギフトゲームの為に放し飼いにされた幻獣が……もう1人?」
放し飼いにされた幻獣の事を思い出し言葉にした矢先、ジンの放った〝もう1人〟の言葉にギギギ、と音が出そうな硬い動きで回りを見渡すと、そこに居るのはジンと黒ウサギ、飛鳥、耀の四人だけであった。
「じ、ジン坊ちゃん、もう一人、白g…銀髪の女性が居ませんでしたっけ?」
その場に居ないニャル子の存在に対して、横のジンに聞く黒ウサギ。
「彼女なら『未知の世界が私を待っていますよぉぉ!!』って中に、止められなくてゴメン」

　その言葉を聞き、俯く黒ウサギ。彼女が突然顔を上げるとその髪は鮮やかな赤色に代わる。
「ジン坊ちゃんはニャル子さんをお願いします!!私は、もう1人の問題児様を捕まえてきますので!!――〝箱庭の貴族〟と謳われるこのウサギを馬鹿にしたこと、骨の髄まで後悔させてさしあげます!!」
　そう言うやいなや、黒ウサギはとてつもない速さで地を駆け、木々の間を飛び回り、あっと言う間に見えなくなる。
「……箱庭のウサギはずいぶんと早く飛ぶのね」
「……すごい…」
「ウサギ達は箱庭の創始者の眷属。力もそうですが、様々なギフトの他に特殊な権限も持ち合わせた貴種です。彼女ならば大丈夫でしょう」
　黒ウサギの行動に唖然としている飛鳥達に対して、ジンはそう言うと言葉を続ける。
「そんな事よりも中に入りましょう、先に入った方も中で移動していれば、そのうち会えるでしょう。あ、ボクはジンといいます、コミニュティのリーダーをしています」
「そうね、いい加減疲れたわ。私は久遠飛鳥よ、よろしく。それと、そこの猫を抱えているのが、、」
「春日部耀、よろしく…」

「よろしくお願いします」
会話を終えると、ジンを先頭に中に飛鳥と耀は門の内側に入っていった。
―同時刻・箱庭・第２１０５３８０地区―
大道理を歩く大勢の人々、その人々は人種も様々で中には人とは違う部位を持つ人々も多数存在する、その中においてニャル子は横道からそれた細い通路をあちこち見て回っていた。
「へぇー、想像していたのとはちがいますねぇ」
完全におのぼりさん状態のニャル子、そんな彼女に１人の男が近づいていく。
「御嬢さん、ここいらでは初めて見ますね。もしや、外の世界から箱庭に来たばかりですか？」
ニャル子に対して声をかける紳士風の男性。それに対して、ニャル子は目をパチクリとさせると―
「ナンパですか？」
―その言葉に男性は肩をガクッと落とすと苦笑いを浮かべる。
「いや、ナンパというわけではありません、、と言っては素敵なレディに失礼ですかね。ここいらでは見たことのない素敵なレディが居るから声をかけてみただけですよ」
「素敵なレディってお上手なんですからぁ!!ちょっと、初めて見る場所が珍しかっただ

けですよぉ」
　男性の言葉に対して若干うれしそうに返すニャル子、男性はハハ八ッと苦笑い気味だ。
「……と、着たばかり、という事はまだコミュニティには属していないという事でしょうか?なら、私のコミュニティに来られてはいかがでしょうか?」
「〝私の〟コミュニティ?」
　ニャル子の言葉を聞き、男性はしまった、と言う表情を浮かべる。
「これは失礼。自己紹介が遅れてしまいました。私はこの箱庭２１０５３８０外門に本拠を構えます、〝フォレス・ガロ〟のリーダーのガルド＝ガスパーと言います」
「これはこれは、私は八坂ニャル子、と言います。宜しくお願いします」
「こちらこそ。で、どうです?自慢ではありませんが、私のコミュニティはこの２１０５３８０外門での多くのコミュニティを傘下に持つ、大手のコミュニティ。入って損はないと思いますが」
　その言葉を受け、ニャル子は「うーん」と少し考えた後、ふと思いついたように言う。
「では、私のギフトゲームをクリアしたらいいですよ?」
　その言葉を受け、ガルドは以外そうな表情をする。
「ほう、箱庭に来たばかりの貴女とギフトゲームですか。して、どのようなゲームでしょ

うか？」

　そのガルドの問いかけに対して、ニャル子は軽い調子で答える。

「いやー、ギフトゲームと言っても簡単な我慢大会みたいな物ですよ、私もどんな事が出来るのか知りたいだけですので」

　それを聞きガルドは考える。

（ふむ、興味本位か。なら、そう大したゲームでもないだろう）

　少し考えた後、ガルドはニャル子に対してにやりと笑いながら返答する。

「良いでしょう、そのギフトゲーム、受けましょう」

「おｋ、ゲーム成立デス!!」

　その言葉と共に契約書類（ギアスロール）が造られ――

「「……」」

「契約書類（ギアスロール）って、どうやって出すんです？」

　――なかった。

「ハハハ…ゲームの内容を考えて念じれば出てきます、あとはその契約書類（ギアスロール）に両者が同意すれば良いだけです」

　苦笑いを浮かべながら言うガルド、そのガルドにニャル子は「どうも」と軽く礼を言う。

「では改めて、ゲーム成立デス!!」
その言葉と共にニャル子の手に光が集まり契約書類(ギアスロール)形造られていき――
「あ、そうそう…１つ、言い忘れてました」
――その言葉にガルドはニャル子に顔を向ける。その視線の先にはニヤリとした表情のニャル子――
「ガルドさんのチップはあなたの所有する全てで良いデスよ?」
――その言葉と共に、ニャル子の手の上の光が収まり黒い契約書類(ギアスロール)が姿を現す――
「な、魔王、だと!!?」

―ギフトゲーム名”Ｗｏｏｄ　ｏｆ　Ｎ，ｇａｉ”―
―プレイヤー―
ガルド＝ガスパー
―ホストマスター側　勝利条件―
・プレイヤーの死亡。
―プレイヤー側　勝利条件―
・歴史の流れを正しく見届ける。
―プレイヤー側　制限事項―

・歴史の流れの阻害。
・ゲーム領域内の生物の殺害。
―報酬事項―
・プレイヤー側が勝利した場合、ホストマスターの所有権を得る。
・ホストマスター側が勝利した場合、プレイヤーの所有物を全て得る
―宣誓　上記を尊重し、ホストマスターの名の下ギフトゲームを開催します―
”Ｎｙａｒｌａｔｈｏｔｅｐ”印

次の瞬間、ガルドの視界に移る光景は石づくりの壁の細い通路ではなく―
「ど、どこだ此処は!!?」
―背の高い木々に囲まれた森であった。
こうして、”箱庭”での邪神の初ゲームがはじまった。

第４話～森の中のようですよ?・～

「はぁ……はぁ……ッ…」

背の高い木々が立ち並ぶ森、その木々に光が遮られている藪の中を体が傷つく事も考えずに進み続ける男が一人。

―ソレは獲物を追いかけていた―

「…くっ…クソガあァぁァァ!!」

その男の後方より追いかける異形の存在達。

―ソレは芋虫のような巨大な体をうねらせ常に変化させながら飛んでいた―

「…はぁっ!!」

男が腕を振り、空気の刃を飛ばすがそれは素早い動きで回避する。

―ソレは蝙蝠のような1枚の翼を持ち、常に暗闇にひそみ時を待っていた―

「ちっ…っ!!?」

男がひときわ大きな藪の近くを通った時、ソレがもう1匹現れ、男の腕に噛みつ―

―そしてソレは血と生命を求め、その高い知性を持って獲物を追い立てる―

「ガっ…Ｇａａａａａａａａａａａａａａａａａａａ!!!!」

―肉が潰れ、骨が砕ける音と共に男の腕を食いちぎった。

―そう、ソレはまさに狩人であった―

腕を食いちぎられた獲物―ガルドは腕を食いちぎられて、尚もその場から逃げようとする。そして、彼が森の中に入り込むまで見ている狩人。

（くそッ…なん…で…こんな目に…）

彼の、いや、彼達の狩り《ハンティング》の始まりは1時間ほど前に遡る―――

「ど、どこだ此処は!!?」

いままで居た路地から、見慣れぬ森に突如移動したガルド。周りを見渡し、少しばかり冷静になった頭で呟く。

「っ、魔王のゲーム盤か…」

流石は一応とはいえ組織の上に立つ者といった所だろうか、多少の慌てが見れる物の現状を打破する為行動を始める。

（くそっ!!まずはゲームのルールとクリア条件の確認か…）

ガルドは先ほど受け取った黒い契約書類（ギアスロール）を取出し、中身を確認する。

―ギフトゲーム名”Ｗｏｏｄ　ｏｆ　Ｎ’ｇａｉ”―
―プレイヤー―
ガルド＝ガスパー
―ホストマスター側　勝利条件―
・プレイヤーの死亡。
―プレイヤー側　勝利条件―
・歴史の流れを正しく見届ける。
―プレイヤー側　制限事項―
・歴史の流れの阻害。
・ゲーム領域内の生物の殺害。
―報酬事項―
・プレイヤー側が勝利した場合、ホストマスターの所有権を得る。
・ホストマスター側が勝利した場合、プレイヤーの所有物を全て得る
―宣誓　上記を尊重し、ホストマスターの名の下ギフトゲームを開催します―
”Ｎｙａｒｌａｔｈｏｔｅｐ
”印
「……」

ガルドは契約書類（ギアスロール）を何回も読み返しながら、思考を繰り返す。
（”Ｗｏｏｄ　ｏｆ　Ｎ，ｇａｉ”…か。このゲーム盤の名称か？いや、”歴史”とやらに関係した単語か隠語の類か？『歴史の流れを正しく見届ける』という事は時間経過系か、それとも謎解き系のゲームか？時間経過ならば”歴史”の現場を探さなければ”見届ける”事が出来ないが、この森全体が範囲となるのか、指定の場所があるのか。謎解きならば何か間違いのある”歴史”を”正しく”すればいいのか？『歴史の流れの阻害』…”阻害”とは手出し全般の禁止なのか、一定の行動の禁止なのか。『ゲーム領域内の生物の殺害』という事は死亡に至らない攻撃は大丈夫という事か…魔王側の勝利条件に『プレイヤーの死亡』があるという事は相当の危険があるという事、いや、魔王のゲームというだけで十分危険だ…『Ｎｙａｒｌａｔｈｏｔｅｐ』…くそっ…聞いたことがない名前だ。どんなゲームか、検討もつかん…）
繰り返し同じ様なことを考え続けるガルド、５分ほどその場で考えていたガルドは契約書類（ギアスロール）に向けていた視線を上げ一息つく。
「チッ…結局は”歴史”とやらについて調べるしかない、と言う事か。」
呟くとガルドは森の奥へと１歩踏みだそうとし―
「……ッ…!!?」
―首の後ろに何かかゆい物を感じ、本能の指示するまま前に飛ぶ。直後―

―ドゥオオオオオオオオオン!!!!!―

―先ほどまでガルドがいた地点に巨大なナニかが降ってきた。

「クソ、敵か!?」

ガルドは警戒して降ってきた衝撃で砂煙が起きている地点を見る。

「……」

段々と晴れてくる砂煙、それと共に襲撃者の姿が明らかになる。

「な、なんだ…コイツは…」

芋虫のような巨大な体、蝙蝠のような1枚のはね。常にうねる体。

―ＧＡＡＡＡＡＡ!!!!!―

大きな雄叫びを上げる謎の名状しがたい生物がそこにいた。

こうして、狩人とガルドの狩り《ハンティング》が始まった。

そして冒頭に戻る―――

――――森の中、片腕を失い満身創痍のガルドが重い足に鞭をうち、のろのろと重い足取りで進む。

「…はぁ…はぁ…」

ちぎれた片腕には布を用いた簡易的な止血が施されている。

「くっ…あれ、は…」
ふいに、横を見てみると其処には開けた場所があり、中央には地面に突き刺さる形で大きめの平石が太陽の光に晒されている。
このゲームが始まってから初めて目にする物にガルドは周囲に警戒しながらも近づいていく。
「これは、何かの手がかり…か?」
その平石には顔の無い無定形の生物のような者が書かれていた。
「この平石だけか…ほかになにか…」
ガルドが他になにか無いか周りを見渡すが特にこれと言った物はない。
そこでガルドは後ろから何かの気配を感じとり後ろを向く。
「ッ…また、か!?」
ガルドが顔を向けた方向には先ほどからガルドを追い、その片腕を食いちぎった異形の生物が森の中の暗がりからガルドの様子を窺っている。その数は目に見える数で2匹ほど、しかし気配を探ってみれば森に隠れた闇の中に多くの気配が有るのがわかる。
「……」
無言で構えるガルド、そこで異形の生物の様子がおかしい事に気づく。
(…襲ってこない、だと?)

そう、異形の生物は暗闇からガルドの様子を窺うだけで襲ってこないのである。
（この平石か、もしくは太陽の光か…）
即座に他の場所と違う点を挙げ、予測するガルド。
（どうでもいい…いまは休んで、このゲームの攻略方法を考えなければ…）
いつ異形の生物たちが再び襲ってくるかわからないため、警戒だけは怠らず、ガルドはしばしの休憩に入った。
ガルドが休憩に入った同時刻、どこか遠い場所――――

――――ガルドが居る森とは違う、どこかの建物の中。
そこでは複数の人物により、混沌とした様子を見せていた。
１人は部屋の中央、何やら円形の模様の中に不規則的な模様が書き込まれ、その隅には蝋燭が灯された魔法陣の傍で呪文を唱える男。
男は１文字１文字に力を籠めながら呪文を紡いでいく。
「ふんぐるぃ
むぐるうなふ
くとぅぐあ
ふぉまるはうと

うがあ―ぐああ
なふる
たぐん
いあ!!
くとぅぐあ!!」
男が呪文を紡いでいる最中、その部屋の外では儀式を止めようとしているのか数人の男女が争う声が聞こえる。
しかし、呪文を唱える男は気にも留めずに言葉を紡ぐ。
「ふんぐるぃ
むぐるうなふ
くとぅぐあ
ふぉまるはうと
うがあ―ぐああ
なふる
たぐん
いあ!!
くとぅぐあ!!」

そして、部屋のドアが勢い良く開き、儀式を止めようとする男女が部屋に入ってくる。
しかし―
「ふんぐるい
むぐるうなふ
くとぅぐあ
ふぉまるはうと
うがあ―ぐああ
なふる
たぐん
いあ!!!
くとぅぐあ!!!!」
―一歩遅く、呪文が完成してしまい、魔法陣の中央から炎が噴き出す。
「…私をよんだのは誰?」
その炎の中から炎を纏った少女が現れる。
その少女に対してひれ伏す男。
「おお!!偉大なるクトゥグアよ!!私です、私が呼びました!!」
仰々しい様子で少女に語りかける男に対して、少女はその身に纏う炎とは対極の冷た

い視線を男に向ける。

「そう…」

少女が無言になったのを見て話を聞いてくれると判断した男は、少女に対してひれ伏したまま話を続ける。

「クトゥグァよ!!私はあなたに願います!!どうか、どうか悪しき邪神、這い寄る混沌、ニャルラトホテプの住処、ンガイの森を焼き払うため、力をお貸し願いたい!!」

ニャルラトホテプ、その名を聞いた瞬間、少女の顔にニヤリとした笑みが浮かぶ。

「ニャルラトホテプの住処…ンガイの森…」

少女の呟きを聞いた男は、その顔に希望の色をみせ、ひれ伏せていた顔を上げる。

しかし―

「な、クトゥ――」

その場にすでに少女の姿がなく、代わりに少女の残した炎が風に揺られる花弁のように舞い―

「――グァはどこにいっ――」

―炎の花弁が床に着いた瞬間―

「――!!!!」

―大きな炎が部屋どころか辺り一面を焼き尽くした。

同刻—ガルドの居る森の中——

——遠い地の建物一面が炎に包まれてるその同刻、ガルドの居る森にも異変が及んでいた。

「な、なんだ空が…」

空気が変わった事をいち早く察したガルドが空を見ると—

「…あかい」

—空は鮮やかなあかに彩られていた。

しかし、異変はそれだけに留まらない—

—■■■■■■■■■■!!!!!!—

—森に響く不気味な叫び声—

「!!?…奴らが…」

—先ほどまでガルドを追いかけていた異形の生物、その生物を赤い球体状の何かが追いかけ炎を使って焼き殺していた。

「…くっ、早く逃げなければッ!?」

いつ、その炎が自分に向けられるともわからない、逃げようと球体状の何かから背を向けるが背後の森は既に炎に覆われていた。

「チッ…!!?」

ならば、正面突破と思い再度後ろを見ると目に入るのは鮮やかな赤。

ガルドは既に炎に囲まれていた。

「あ…う…」

逃げられない炎、その炎に対して感じる潜在的、本能的な恐怖に対してガルドは1歩、また1歩と下がっていく。

「ッ!!!?」

1歩ずつ下がっていくガルドの背に何かが当たる。

ガルドはそちらを勢いよく振り返る。

すると目に入るのは先ほどまで自分が休憩に使っていた平石。

「……」

炎に囲まれた絶対絶命の最中、しかし、ガルドは平石…正確には平石に刻まれた顔の無い無定形の生物から目が離せないでいた。

「!?」

数秒、平石を見つめたガルドが体を震わせる。

「来るな…こっちにくるなぁ!!!?」

ガルドは何もない空間に対して攻撃を繰り返しながら平石から離れていく。

「やめろぉ!!!!まとわりつくなぁぁぁぁ!!!!」

攻撃を止めたかと思うと突如、なにかを払うような動作を繰り返す。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!やぁめろぉお!!おれがわるかった!!だから、やめてくれぇぇぇぇぇ!!!!ひっ、くるなぁ!!!!おれに、ちかずくなぁぁぁ!!!!」

そしてガルドはなにかから逃げるように走り出す。炎に囲まれ、焼かれる事も気にせず、ひたすら、只々ひたすらに何かから逃げ続ける。

彼の瞳に何が映ったのか、なにから逃げているのかは誰にもわからない。

―顔の無い無定形の生物か

―彼に裏切られたかつての仲間か

―彼が殺し、食べた女子供か

―彼に殺された者の遺族か

―彼を追いかけていた異形の生物か

―彼に旗印を奪われた者たちか

―はたまた、その全てか

それは誰にも分からない。分かるのは彼自身であり、その彼は今や燃え盛る森の中だ。

彼が走り去ったああと、その場に残されたのは顔の無い無定形の生物が描かれた平石

のみであり、その平石も燃え盛る炎と倒れてくる木々にその姿を消した。

―ギフトゲーム名”Ｗｏｏｄ　ｏｆ　Ｎ’ｇａｉ”―

―プレイヤー―

ガルド＝ガスパー

―ホストマスター側　勝利条件―

・プレイヤーの死亡。

―プレイヤー側　勝利条件―

・歴史の流れを正しく見届ける。

―プレイヤー側　制限事項―

・歴史の流れの阻害。

・ゲーム領域内の生物の殺害。

―報酬事項―

・プレイヤー側が勝利した場合、ホストマスターの所有権を得る。

・ホストマスター側が勝利した場合、プレイヤーの所有物を全て得る

―宣誓　上記を尊重し、ホストマスターの名の下ギフトゲームを開催します―

”Ｎｙａｒｌａｔｈｏｔｅｐ

”印

―結果―

・全プレイヤーが死亡しました。

報酬事項に則りプレイヤーの所有物の所有権がホストマスターに移ります。

第5話～サウザンドアイズのようd、ぎゃーーー!?～

大通りから外れた露地。その隅でごそごそと何かをあさっている一つの陰。

「うーん、イイ物が無いですねぇ。ガルドさんのパンツとかいらないですよ」

その手には黒い契約書類（ギアスロール）。それには以下の通りである。

―ギフトゲーム名”Ｗｏｏｄ　ｏｆ　Ｎ，ｇａｉ”―

―プレイヤー―

ガルド＝ガスパー

―ホストマスター側　勝利条件―

・プレイヤーの死亡。

―プレイヤー側　勝利条件―

・歴史の流れを正しく見届ける。

―プレイヤー側　制限事項―

・歴史の流れの阻害。

・ゲーム領域内の生物の殺害。

―報酬事項―
・プレイヤー側が勝利した場合、ホストマスターの所有権を得る。
・ホストマスター側が勝利した場合、プレイヤーの所有物を全て得る
―宣誓　上記を尊重し、ホストマスターの名の下ギフトゲームを開催します―
”Ｎｙａｒｌａｔｈｏｔｅｐ印
―結果―
・全プレイヤーが死亡しました。
報酬事項に則りプレイヤーの所有物の所有権がホストマスターに移ります。
・以下の恩恵（ギフト）の所有権を得ました。

一番したから先に並べられるのはガルドの所有していたギフトやコミュニティ〝フォレス・ガロ〟の所有権、多数のコミュニティの旗印等の価値ある物から始まり、ガルドの衣類やパンツ、夜の玩具に秘蔵の○○本、趣味の道具にガルド宅の食器等、ありとあらゆるガルドの”元”所有物が書かれていた。
そして最後に書かれているのが〝ラプラスの紙片〟、箱庭においては一般的にギフトカードと呼ばれ、所有ギフトの表示、ギフトや物の収納や所属コミニュティの表示等、

様々の用途がある便利なカード型の恩恵(ギフト)である。
　もとはガルドの所有物であり、現在ニャル子が所有するそれは元はガルド自身を主張するような虎柄模様であったが、現在はニャル子の「とりゃ」との軽い掛け声と共に白と黒の市松模様になっており、もとからニャル子が持つ恩恵(ギフト)や今回ガルドから得た恩恵(ギフト)が所せましと書き込まれている。
「う～ん、ごちゃごちゃしてて何が何やら、整理が必要ですかねぇ」
　そのギフトカードをしばらく弄り、これが能力や所有物を表示し物の取出しが可能なものと判断したニャル子は、その物の多さに整理が必要かと思う。
　おもむろにニャル子が手を横に突出し、指を弾くと周りの風景が一瞬で変わり、先ほどまでガルドが戦っていた森の平石の前の現れる。その森はどういう訳かあんなにも燃えていたにも関わらず、そんな事なかったとでも言わんばかりに背の高い木々が存在を主張している。
　ちなみにニャル子はこのような恩恵(ギフト)をほぼ本能的に、「できるかな？できるよな？よしやろう」といった軽いノリで使用している。
「さてと、まずは…」
　ニャル子は少しばかり空いている場所を見つけると、自身がいらないと判断した物を次々と出して一纏めにしていく。

「これもいらない、あれもいらない」
次々と出されていく品々、ガルドのパンツにガルドの衣類、ガルド宅の食器に様々なコミュニティの旗印、ガルドの夜の玩具に秘蔵の○○本、コミュニティ〝フォレス・ガロ〟の所有権に旗印、ガルド宅の所有証明書やよく分からない書類等々。
それらを一纏めにするとニャル子は数メートル離れ、品々に一刺し指を向ける。
「メラ!!」
おもむろに叫ぶと指の先から火の玉が飛び出て品々に火をつけて次々と燃やしていく。
それを見ながらニャル子はビシッと何やらポーズをとり…
「私のメラは１０８式まであります!!」
…どこかに向かってどや顔をむけていた。
所かわって商店の立ち並ぶ通り。
「はぁぁ、結局ニャル子さんはみつかりませんでしたぁ」
「まぁ、そのうち見つかるわよ」
そこを歩いている４名の男女、黒ウサギ、十六夜、飛鳥、耀……それと猫。
頭を抱えている黒ウサギを飛鳥が慰めている。
彼らは世界の果てで蛇神に喧嘩を売っていた十六夜を黒ウサギが確保した後、別行動

をしていたジンと合流。
今の黒ウサギたちの現状…破滅寸前のコミュニティ、広大な土地に対して少なすぎる資材等についての話を終えた後、十六夜達のギフトの鑑定を行う為にコミニュティ”サウザンドアイズ〃という所に向かっているところである。
その道中、桜のような花を咲かす木を見て飛鳥が呟く。
「桜の木……ではないわよね？花弁の形が違うし、真夏になっても咲き続けているはずがないもの」
その呟きに対して続けて返す十六夜と耀。
「いや、まだ初夏になったばかりだ。気合の入った桜が残っていてもおかしくないだろ」
「？今は秋だったと思うけど」
その互いの発言に、互いに顔を見合わせて疑問を表情に出す3人。
その3人の様子を見て、黒ウサギがくすくすと笑いながらも、3人の表情と前後の会話から全員が抱えている疑問に答える。
「皆さんそれぞれ違う世界から召喚されているのデスよ。元いた時間軸以外にも歴史や文化、生態系など所々違う箇所があるはずです」
「へぇ？パラレルワールドってやつか？」
「正しくは立体交差並行世界論というものなのですけども……今からコレの説明をして

しまいますと時間がかかってしまいますので、またの機会ということに」
話を聞いて素直な感想を上げる十六夜に対して、細かな修正点を伝える黒ウサギ。
そこで目的地についたようだが、閉店の時間らしく、店の前には店じまいを行う女性店員がいる。
「ま「待った無しです御客様、うちは時間外営業をやっていません」
黒ウサギは店員に待ったをかけようとするが予測していたかのようにスッパリと切り捨てられる。
「なんて商売っ気の無い店なのかしら」
「ま、全くです！閉店時間の五分前に客を締め出すなんて!!」
「文句があるならどうぞ他所へ。あなた方は今後一切の出入りを禁じます。出禁です」
「出禁!?これだけで出禁とか御客様舐めすぎでございますよ!?」
テンション高く抗議の声を上げる黒ウサギに対して、あくまで冷静に対応する店員。
「なるほど、〝箱庭の貴族〟であるウサギの御客様を無下にするのは失礼ですね。入店許可を伺いますので、コミュニティの名前をよろしいでしょうか？」
そこで黒ウサギが言葉につまるが、十六夜君の方が名乗る。
「俺達は〝ノーネーム〟ってコミュニティなんだが」
「ではどこの〝ノーネーム〟様でしょう。旗印の確認をさ…

コミュニティの名前を聞き、旗印の確認を店員が取ろうとした所で響き渡る2つの声。

「いぃいやほおぉおぉおぃい!!久しぶりだ黒ウサギイィ!!!‼!!!」

「うぉおりやあぁあぁあぁあ!!私、ふたたび参上おぉおぉお!!!!」

突如、同じタイミング、同じようなテンションで別々の方向から飛んできた二人の少女…ニャル子と和装の少女…は黒ウサギの寸前で衝突し——

「「ずごっく!!?」」

——同じような悲鳴を上げ——

「「ぎゃん!!!!!」」

——一緒に転がり道の横の水路に落ちていき——

「おぉ、黒ウサギとも違うがこれはこれでいいのぅ!!ほぅれ、ここが良いか、ここが良いか!!」

「え、ちょ、どこ触ってんですか!!?ぁ、ぎゃ————————————————!!!!」

——その場の空気を何とも情けのない物へとした。

第６話～白き夜叉～

ニャル子と和装の少女が衝突し、共に転げ落ちた後、その場で唯一といっていい常識人である黒ウサギが和装の少女を止め、逆にセクハラにあうという軽いトラブルがありつつも、店員よりも立場が上らしい少女に連れられ畳の部屋へ通された５人と猫１匹。

ちなみに黒ウサギが奮闘している間に十六夜が店員相手にセクハラに近い要求をしていたりしたが、完全な余談である。

その５人…黒ウサギ、十六夜、飛鳥、耀、ニャル子…を一通り眺めると和装の少女は手に持つ扇子を今までの痴態からは想像が出来ないほどに優雅な動作で開き口を開く。

「さて、先はドタバタしていてろくに挨拶できなかったからの、改めて…私は四桁の門、三三四五外門に本拠を構えている”サウザンドアイズ”幹部の白夜叉だ。ここの黒ウサギとは少々縁があってな。コミュニティが崩壊してからもちょくちょく手を貸してやってる器の大きい美少女と認識しといてくれ」

その尊大な物言いに対して黒ウサギが「はいはい、お世話になってますよ」等と投げやりだが特に反論等をしないあたり、少女…白夜叉が黒ウサギ達に対して手を貸してい

るのは事実なのだろう。
と、そこでニャル子が疑問の声を上げる。
「すいませーん、コミュニティが崩壊ってなんですか?」
そこで黒ウサギがしまった、といった表情をする。
実は黒ウサギが所属するコミュニティ〝ノーネーム〟はその名と旗印を魔王と呼ばれる存在に奪われ、かつてのメンバーもバラバラにされた状態であり、組織としての機能はほぼ果たしていない状態であった。
そして、飛鳥と耀は今は別行動中のジンより説明を受けていて、十六夜は自身でその事実に気付いていたため、一人行方不明だったニャル子はその存在を知らなかったのである。
「あぁ、説明を忘れていました。実は…」
そこで改めて黒ウサギがニャル子に説明を始める。
曰く、〝主催者権限〟と呼ばれる特権を悪用し、他者から様々なものを奪い、自由気ままに行動する〝魔王〟と呼ばれる存在が居る。
曰く、その〝魔王〟により黒ウサギの所属するコミュニティは、コミュニティの命ともいえる旗と名を奪われ、仲間も各地にバラバラになってしまった事。
曰く、そのため、現在はノーネームと呼ばれ、少年ともいえる年齢のジンがリーダー

を務め、コミュニティの再建を図っていること。
　曰く、そのために異世界より皆を召喚したため、出来れば協力してほしい事。
「ど、どうでしょう？」
　伝える事を伝えると、黒ウサギはニャル子を懇願するように見つめる。
　それに対してニャル子は…
「魔王だなんて、そんな酷い方が居るなんて…任せてくださいい!!一緒にがんばりましょう!!」
　こぶしをグっ、と握り、黒ウサギにサムズアップする。
「に、ニャル子さん!!」
　それに対して感激したのか目じりに涙を浮かべる黒ウサギ。
　この場に某虎紳士が生きていたのならこう言うだろう…
　…おまえがいうな…
　…と。
　ちなみに、この邪神、自分が大量の旗を燃やした事も、それにより現在多くのコミュニティがとばっちりでノーネーム（旗なし）になっているだろう事は軽くスルーしている。さらに言ってしまえば元ガルドの支配地域では現在、暴動が起こっていたりする。
　更に、更に、ニャル子と黒ウサギがこの三文芝居をしている間に白夜叉と十六夜達は

外門の構造等の話を終えて、なおかつ十六夜達が盛大に白夜叉に対して喧嘩を売っていたりする。

前後の会話は要約してしまえば「お前を倒せばここらで最強っーことだろ？おい、ギフトゲーム(決闘)しろよ」といった内容の言葉、それを受け、白夜叉はニヤリとした笑みを浮かべると十六夜達に対して向き直る。

「おんしらが望むのは”挑戦”か……

……もしくは、”決闘”か？」

その言葉が終わると共に白夜叉を中心に世界が形造られていく。

白い雪原に凍る湖畔、そして水平に回る太陽。

それら全てが白夜叉を表し、その身を象徴するフィールドでありゲーム盤。

十六夜達にかけられた、その言葉。ようやく十六夜達の会話に参加したニャル子は話と状況についていけず、相手の立場が分かる黒ウサギはおおよその話の流れに予想がついたために慌てる。

「今一度名乗り、問おう。私は”白き夜の魔王”……太陽と白夜の星霊・白夜叉。おんしらが望むのは、試練への”挑戦”か？それとも対等な”決闘”か？」

その言葉…そして圧倒的と言える程に感じる存在感。それらに対して十六夜達（邪神除く）は唾をのみこみ、冷や汗を流す。

「水平に廻る太陽……そうか白夜と夜叉。あの水平に廻る太陽やこの土地は、オマエを表現してるってことか」
「如何にも。この白夜の湖畔と雪原、永遠に世界を薄明に照らす太陽こそ私がもつゲーム盤の一つだ」
　その言葉に対し、十六夜達に旋律が走る。
「これだけ莫大な土地が、ただの…ゲーム盤……!!?」
「して、おんしらの返答は?”挑戦”であるならば、手慰み程度に遊んでやる。だが”決闘”を望むならば、”魔王”として命と誇りの限り戦おうではないか」
　その言葉を受け、十六夜はしばし瞳を閉じ、そして開く。
「参った、やられたぜ。さすがにこれだけのゲーム盤を用意されたら…な。今回は黙って試されてやるよ」
　そのまったくもって素直でない言葉に苦笑を返して、白夜叉は他の二人にも問いかける。
「ククッ……して、他の童達も同じか?」
「……ええ。私も試されてあげていいわ」
「……右に同じ…」
　その言葉を聞き、安堵する黒ウサギ。

飛鳥と耀の言葉を聞いた白夜叉は次いで、ニャル子に視線を向ける。
「して…おんしはどうする？」
その言葉を受け、ニャル子は顎に人差し指を当て「うーーん」と軽く悩む様子を見せ……
「…決闘で」
……至って軽い様子で答える。
それに対し、黒ウサギが言葉を発しようとする……
「に、にゃるこさッ……!!?」
……しかし、突如として場に満ちた威圧感にその口を閉じる。
その威圧感の元はニャル子ではなく……
「…し、しろやしゃ…さま…？」
……獰猛な笑みを浮かべた白夜叉であった。

第７話～神語りのようですよ?～

場に満ちる静寂。
この静寂を作り出しているのは２人の少女……否、二柱の神であった。
片方は獰猛な、それでいて楽しげな笑みを浮かべた着物姿の白髪（はくはつ）の少女。
白夜の星霊であり、夜叉の神霊、太陽を司る存在の内の１である少女”白夜叉”
もう片方は白夜叉から発せられるプレッシャーを受けながらも、そのニコニコとした表情を崩さない白黒の洋服姿の銀髪の少女。
狂気と混乱の権化であり、元は顕現の内の１であり、奇跡とも言える偶然からＮｙａｒｌａｔｈｏｔｅｐ（ナイアーラトテップ）から別れ、個として確立したＮｙａｒｌａｔｈｏｔｅｐ（ニャルラトホテプ）…”
ニャル子”
「ぐッ…なんてプレッシャーだ…これが、白夜叉の本気か…!?」
白夜叉から放たれるプレッシャーについ声を漏らす十六夜。
その彼の後ろでは彼ほどの力のない飛鳥と耀が青ざめた表情で、なんとか立っている。
「…いえ、白夜叉様はまだ本気ではありません。でなければ、こうして私たちが立てて

る筈がありません…!!」

その十六夜の言葉に黒ウサギが答え、十六夜は言葉に出さずともその表情で驚愕を示す。

と、そこで無言だった二柱に動きがある。

「…さて、ニャル子じゃったか？お主は私に挑戦するといった、その理由を問おう」

「…とくに理由があるわけではありませんよ。まぁ、あえて言うならば面白そうだからですかねぇ？」

その表情とは裏腹に、冷静な物言いの白夜叉の言葉に対して、返すニャル子。

「ほう、おもしろそうだから、とは。長く生きてきてそんなに軽いノリで挑戦を選ばれたのは幾回とない…」

楽しげな表情を更に深ませながらも淡々と言葉を続ける白夜叉。

「そんな連中は幾通りのパターン分けが出来ての、余程の馬鹿か、余程の自意識過剰か…」

そこで言葉を切ると、手に持った扇子をパタンと閉じ……

「……最後に、それ相応の力があるかじゃ!!」

……手に持った扇子を距離の有る位置に居るニャル子に向けて横に振る、その瞬間、ニャル子の居た位置を中心に爆炎が上がり、その爆発が連鎖してより大きな爆発にな

る。

「…ッ……」

　とっさに顔を覆う十六夜達に対し、白夜叉は表情を変えずに炎を見続ける。

「に、ニャル子さん!?し、白夜叉様、な、なにを!!?」

「案ずるな、無事じゃよ」

　白夜叉に詰め寄ろうとする黒ウサギを、視線だけで制しながら言う白夜叉。

「いやー、急過ぎてビックらこきましたよ」

　その言葉の通り、今までと変わらない様子で炎の中から歩いてくるニャル子。

　その様子に「やはりか…」と呟く白夜叉。

「それは悪かったの、しかし無傷とは傷つくのぉ、お主はどのような神権をもっておるのじゃ?」

　何時もと変わらない様子のニャル子に対して唖然としていた黒ウサギは、白夜叉の言葉に大声を上げる。

「ええ!!?し、神権!?そんな、神権もちならば黒ウサギの素敵耳でわかるはずです!!」

　その言葉に白夜叉はにやりと笑みを返す。

「やはり気づいておらんかったか。まぁ、私も胸を揉み扱いて初めて気付いた故、しょうがないがのぉ」

「し、白夜叉様がそこまで近づいてやっと気づけたという事でございますか？」
「左様。おさらく秘匿性の高いギフトを持っているのじゃろう」
ニャル子の神性について黒ウサギに顔を向け、説明する白夜叉。
その説明に驚愕の表情で黒ウサギは返すが、少し白夜叉から距離を取る。
「さて、という訳じゃが…」
黒ウサギに向けていた顔をニャル子に戻す白夜叉。
「…なにしてるのじゃ？」
そこには白夜叉から更に距離を持ち、心なしか体を守るように抱きしめたニャル子が。
「あなた、やっぱりそっちの人なんですか!!?」
あらぬ（？）疑いをかけられた白夜叉はニヤリと笑うと、すり足でニャル子に近づいていく。
「ふふふふ、どうかのぉ、お主の体でためしてみるか？どうせ、我々が本気で戦っては他のも巻き添えを食うしのぉ、今回は平和に逝こうではないか…」
その言葉と共に白夜叉の手のひらに現れる契約書類。
―ギフトゲーム名”神々の鬼ごっこ”―
―プレイヤー―

八坂ニャル子
—ホストマスター側　勝利条件—
・プレイヤーの確保。
—プレイヤー側　勝利条件—
・一時間の間、ホストから逃げ切る。
—プレイヤー側　制限事項—
・空間移動系ギフトの使用不可。
—報酬事項—
・プレイヤー側が勝利した場合、ホストマスターよりギフトが贈られる。
・ホストマスター側が勝利した場合、プレイヤーの情報を得る。
—宣誓　上記を尊重し、ホストマスターの名の下ギフトゲームを開催します—
〝サウザンドアイズ〟印

「え、ちょ……ぎゃ——————————————————!!?」
「ぐふふふ……待たんか——————————————————!!!!!」
瞬間、逃げ出すニャル子に追う白夜叉。
こうして、ここに箱庭一、情けないゲームが始まった。
ちなみに、さりげなく白夜叉が持つ主催者権限が使われており、契約書類（ギアスロール）に書かれた

双女神も心なしか煤けて見える。
結果を言ってしまうと、一時間経つ寸前に白夜又はニャル子を捕まえ、その絶叫がゲーム盤に響き、黒ウサギは新たな仲間（被害者）の誕生に打ち震えるのであった。

―ギフトゲーム名“神々の鬼ごっこ”―
―プレイヤー―
八坂ニャル子
―ホストマスター側　勝利条件―
・プレイヤーの確保。
―プレイヤー側　勝利条件―
・一時間の間、ホストから逃げ切る。
―プレイヤー側　制限事項―
・空間移動系ギフトの使用不可。
―報酬事項―
・プレイヤー側が勝利した場合、ホストマスターよりギフトが贈られる。
・ホストマスター側が勝利した場合、プレイヤーの情報を得る。
―宣誓　上記を尊重し、ホストマスターの名の下ギフトゲームを開催します―

”サウザンドアイズ”印

―結果―

・全プレイヤーが捕まりました。

報酬事項に則りプレイヤーの情報が以下に記載されます。

・プレイヤー名

Ｎｙａｒｌａｔｈｏｔｅｐ

・種族

神霊・半星霊

・所有ギフト

神格”Ｎｙａｒｌａｔｈｏｔｅｐ”

Ｗｏｏｄ　ｏｆ　Ｎ’ｇａｉ

輝くトラペゾヘドロン

配下”シャンタク鳥””忌まわしき狩人”

主催者権限

無貌の神

人格”ニャルラトホテプ星人”

名状しがたいバールのようなもの×２７０以上

冒瀆的な手榴弾
口にするのもはばかられる対艦チェーンソー
白銀の十字剣

第８話～説明回のようですよ?～

・プレイヤー名
Ｎｙａｒｌａｔｈｏｔｅｐ
・種族
神霊・半星霊
・所有ギフト
神格”Ｎｙａｒｌａｔｈｏｔｅｐ”
Ｗｏｏｄ　ｏｆ　Ｎ’ｇａｉ
輝くトラペゾヘドロン
配下”シャンタク鳥””忌まわしき狩人”
主催者権限
無貌の神
人格”ニャルラトホテプ星人”
名状しがたいバールのようなもの×２７０以上
冒瀆的な手榴弾

口にするのもはばかられる対艦チェーンソー
白銀の十字剣
「ほぉ…神霊に半星霊とは、ずいぶんと特殊な身の上じゃな」
「うぅ……よごされた…よごされましたよ……」
「…Ｎｙａｒｌａｔｈｏｔｅｐって、マジかよ、シャレにならねぇぞ…」
「えぇ!?神霊!?半星霊!!?き、規格外です!!想定外でございます!!し、しかも主催者権限まで持っているなんて…」
「あら、色々あるわね」
「……」
白い雪原に凍る湖畔、そして水平に回る太陽。白夜叉を表し、その身を象徴するゲーム盤の中央。そこでは四人の人物と2柱の神が其々、多様な姿を見せている。
ニャル子…改め、ニャルラトホテプ（Ｎｙａｒｌａｔｈｏｔｅｐ）の情報を見て、関心の声を上げる白夜叉。
地べたに倒れこみ、若干肌蹴た服装で涙するニャル子。
その名を見て、自身の持つ知識と照らし合わせ、冷や汗を流す十六夜。
名の意味を知らぬがゆえに、その種族とギフトに驚愕の声を上げる黒ウサギ。
種族、ギフトの知識がないゆえに、その数に関心する飛鳥。
そして、”何か”に惹かれるかのように、書かれた文字の羅列を見つめ続ける耀。

其々の反応が、各各々の素直な反応である。
その反応を見た後、白夜叉が己の考察を纏める。
「…ふむ、種族に関しては私が出生を知るはずもないから分からんが、黒ウサギが何故、こやつの神格に気付けなかったか分かった…ような気がする」
「本当でございますか!?」
最後に小声で何かを付け加える白夜叉に対して、黒ウサギが期待の視線を向ける。
「あぁ、おそらくだが”神格”に”人格”を重ねる事でその身を限りなく人に近づけているんじゃろ。似たような事例を知っていてな、そう間違えた解釈でもないハズじゃ」
「あー、つまりは神様っー存在を人の中に入れたかんじか?」
「左様。お主は何がわかった?その様子だと何か知っておるようじゃが…」
自身の推論を述べる白夜叉に対して、飛鳥などが分からなそうな表情を見せた為、かなり噛み砕いた解釈をする十六夜。
十六夜は白夜叉の言葉に一つうなずくと言葉を紡ぐ。
「あぁ……”Ｎｙａｒｌａｔｈｏｔｅｐ”…読みとしてはナイアーラトテップ、ナイアルラトホテップ、ニャルラトホテプとか色々と有るがどれが正しいかなんてねぇ、人間には認知できねぇ名を無理やり言葉にしただけ、無理に知ろうとすればＳＡＮ値直葬……いわゆる発狂、バッドエンドコースへ待ったなしのあぶねぇ奴だ…」

「こやつがのぉ…」

　さわりを聞き、横でいまだ項垂れる少女を見る白夜叉。

「続けるぜ？…こいつのギフトにもあるが”無貌の神”…つまり姿を持たない神で、姿を持たないが故に千もの姿をもち、その千の姿の顕現を使って世界を破滅と混沌に導く邪神だ」

「つまりは悪役…という事かの？」

「いや、そうとも言いきれねぇんだわ。”Ｎｙａｒｌａｔｈｏｔｅｐ”つーのは最初にエジプトで信仰された神とも言われていてな、後にその存在を畏れた人間によってその存在を秘匿されたが、その神性を割り当てられたのがセトやトートとも言われてんだ」

「そやつらは？」

「セトはエジプト九柱の神々の一柱で荒々しさ、敵対、悪、戦争、嵐等を象徴してる軍神。トートは同じくエジプトで知恵の神、書記の守護者、時の管理人、楽器の開発者、創造神と言われる神だ、ギリシア神話のヘルメスと同一の神とも言われてるな」

「ふむ、畏れの対象とはなっても、必ずしも悪神というわけでは無いという事か…」

「あぁ、他にも色々と逸話があるしな」

「こやつがのう」

「そうなんだよなー」

再び横の少女を見る２人。
「んで、種族なんだが、神霊っーのはまんま神様だろ?半星霊ってなんだ?」
「ふむ…まず、星霊が惑星級以上の星に存在する主精霊のことじゃ。質量・空間を司る最強種でギフトを与える側の存在でもある。半星霊は星の恩恵を得て生まれ、その土地の山神、海神、地母神となる存在じゃ」
その言葉をうけ、少し考え込む十六夜、その様子を見て白夜叉が声をかける。
「…なにか分かるか?」
「……あぁ」
しばらく考え、大まかな予測をすると十六夜はソレを語る。
「Ｎｙａｒｌａｔｈｏｔｅｐっー神の出自は大分特殊でな。アザトースという神から生み出されたと言われてる。アザトースっーのが宇宙の創物主、この世界はアザトースの夢であるともされるな。その息子、もしくは娘と言われ、アザトースが自らの分身として作り出した内の１体がＮｙａｒｌａｔｈｏｔｅｐだ」
「ふむ、つまり、宇宙そのものの恩恵を受けているが特定の星に存在しているわけでは無い…イレギュラー的な半星霊というのがお前の推論か…」
十六夜の発言を受、ソレを引き継いで言葉にだした白夜叉は考え込む。
「ふむ…あながち間違えではないかもしれんの」

「まぁ、完全に理解できるわけじゃないから大まかな想像しかできねぇけどな…」
完全に考え込む二人。
「あ、あの～、お二人様？私たちがお話について行けないのですが…」
と、そこで声をかける黒ウサギ。
そこで白夜叉が申し訳なさそうに、頭をかく。
「あ、あぁ…すまん、すまん。そういえばこやつ達の試練もあったのぉ…」
白夜叉はそう言うと、横に居るＮｙａｒｌａｔｈｏｔｅｐ…ニャル子に声をかける。
「お主もいつまでもそうしとらんで、しゃっきりと顔をあげんか!!」
「どの口がいいますか、それ!!?」
涙目のニャル子が抗議をしつつも立ち上がる。
「あなたの名前、呼び方変えたほうがいいかしら？」
「いままで道りで良いですよ」
「そう、これからよろしく」
「はい。宜しくおねがいします!!」
ニャル子の本名（？）が分かったため、呼び名について聞く飛鳥に答えるニャル子。
「さて、お主たちの試練はこっちでするぞ、ついてこい」
白夜叉の先導で移動をする一行、途中、ボーっとしていた耀に飛鳥が声をかける。

「移動だって。大丈夫?」
「っ……ごめん、ぼーとしてた…」
　いままで寝ていたかの様に動揺を見せる耀。
「あぁ、わかるわ。彼達の話。専門的すぎて私も話について行けなかったもの、ぼーっとなっちゃうわよね」
「う、うん…」
　耀の同様に気付かずに、共に横を歩く飛鳥。
　この時、話に夢中だった白夜叉と十六夜も、その話を理解しようと聞きに徹していた黒ウサギと飛鳥にも、そしてその胸に抱かれた三毛猫も、耀の胸元のペンダントが一瞬くろく濁った事に気付く事はなかった。
「あ、そうでした!!」
　歩いていると唐突に声をあげるニャル子。自然と視線が集まる。
「前は適当な名前でしたので改めまして…」
　そして皆の前に出ると、向き直り息を一息吸い。
「いつもニコニコ、あなたの隣に這いよる混沌、ニャルラトホテプ!!」
　某改造人間のようなポーズをとり……
「です☆」

……ウィンクを決めたのだった。